

みょういちあま ご ぜん ご しょうそく
 「妙一尼御前御消息」
 ふゆ かなら はる こと
 (冬は必ず春となるの事)

ほ け きょう しん ひと ふゆ
 法華経を信ずる人は冬のご
 とし。ふゆ かなら はる
 冬は必ず春となる。い
 まだむかし 間 見 ふゆ
 まだ昔よりきかずみず、冬の
 あき 返
 秋とかえられることを。いまだ
 間
 きかず、ほ け きょう しん ひと
 法華経を信ずる人の
 ぼん ぶ きょう もん
 凡夫となることを。経文に
 は「もしほ け きょう しん ひと
 法を聞くことあらば、
 ひと しょうぶつ
 一人として成仏せざることな
 けん 説 しょうろう
 けん」ととかれて候。

(御書新版1696ページ・御書全集1253ページ)

通解

法華経を信じる人は冬のようなものである。冬は必ず春となる。昔から今まで、聞いたことも見たこともない、冬が秋に戻るということを。

(同じように) 今まで聞いたことがない、法華経を信じる人が仏になれず、ぼんぶのままでいることを。

経文には「もし法を聞くことがあれば、一人として成仏しない人はいない」(法華経方便品第2)と説かれています。

希望の“春”へ前進しよう！

よくわかる解説

皆さんこんにちは！ レオです！ 今月も御書を学び、元気に出発していこう☆

今回学ぶ「妙一尼御前御消息」は、1275年(建治元年)、日蓮大聖人が54歳の時に身延で著され、鎌倉に住む女性門下の妙一尼に与えられたお手紙です。

本抄を送られる4年前、大聖人は竜の口の法難や佐渡流罪という大難に遭われ、さらに鎌倉の門下にも激しい迫害が及んでいました。妙一尼は、夫に先立たれ、幼い病気の子を抱えながら自身も体調が優れないという、厳しい状況でした。それでも彼女は、佐渡や身延へ従者を送り、法華経の信仰を純粋に貫き、大聖人を守ろうとしたのです。

今回の御文で大聖人は、どんなに厳しい状況でも法華経の信仰を貫いた人は、冬が必ず春となるように、絶対に成仏できると断言されます。迫害に遭いながらも信心を貫き通した妙一尼の夫の成仏は間違いないと、彼女に渾身の激励を送っているのです。

この一節には、妙一尼の不屈の魂をたたえるお心と、弟子の安心と幸福を願う師の深い慈愛と真心があふれています。

陸上部でやり投げに挑戦しているメンバーのエピソードを紹介するよ。彼は、スランプに陥って、記録が伸びないことに悩んでいた。自分には才能がないと諦めかけていた時、両親から「冬は必ず春となる」の御文を教えてもらったんだ。それからは、“自分にも必ず「春」が来る！”と信じて、お題目に挑戦しながら練習に励む毎日。すると、自分の課題を見つめ直すことができるようになって、練習の質が向上していったんだ。自信を取り戻して迎えた大会で、自身最高の成績を収めることができたよ。

池田先生は語っています。

「どんなにつらい冬が続いても、希望を捨ててはいけない。希望をなくさない限り、必ず春が来る」

試練の“冬”を乗り越え、希望の“春”へ！ 自身の無限の可能性を信じ抜き、前進していこう！